

□□■□ 活用と普及 【potential】

後方視的対話演習シートは、岩手大学HPにてダウンロードして活用いただけます。→研究に関する報告書等 https://www.edu.iwateu.ac.jp/kenkyuu-2/

□□□■ 資料と広報 【references】

個別の指導計画の作成に資する「後方視的対話」について、演習する職員研修を承ります。先生方がご担当される子どものことを思い浮かべながら、和気藹々としたグループワークにて実施します。お気軽に相談ください。

岩手大学大学院教育学研究科 佐々木 全 TEL&FAX:019-621-6654 E-mail: zensky@iwate-u.ac.jp

後方視的対話の研修プログラム

〈所要時間〉 90~120分程度
〈進行手順〉

解 説：個別の指導計画の意義と、実務的な課題について

事前調査：演習前の参加者の意識の評価

手順説明：後方視的対話の説明と、支援の三観点の説明

演 習：ペアでの実施（役割交代）「20分の対話+5分のふりかえり」×2セット

事後調査：演習後の参加者意識の評価、事前事後の比較による演習効果の確認

総 括：後方視的対話の日常化と活用可能性

* 参加者の感想 *

- ・最初に、支援の評価のところを考えると、その子の支援目標をどこに設定したらよいか考えやすくなった。
- ・共感的な態度で話を聞いてもらえるだけで言語化しやすくなった。
- ・個別の指導計画を初めて作成した。誰かに聞いてもらいながら作るのはとても楽しく、新しい発見もあった。

「後方視的対話」を活用した個別の指導計画の作成の実践例が紹介されています。佐々木・東・坪谷他（2017）では、知的障害特別支援学校の教師同士による日々の実践についての対話や、通常学級の担任教師と特別支援教育コーディネーターとの対話などの活用事例が紹介されています。その中で、「後方視的対話」が日常的なOJTとして、あるいは、実践者の省察としての活用可能性があることが示されました。また、佐々木・東・池田他（2018）では、「後方視的対話」の援用として、高等学校における授業カンファレンスや、小学校における心理検査結果の活用を意図した授業参観記録の作成などの活用事例が紹介されてい

佐々木全(2018)個別の指導計画の作成に対する教師の意識—個別の指導計画の作成要領開発のための予備調査—生活中心教育研究,32,29-34.

佐々木全・東信之・柴垣登・鈴木恵太・滝吉美知香・千葉紅子・中村宏宏・三浦隆・藤谷憲司・小野章江・川村真紀・菅原純也・橋場美和・芳門淳一・高橋走・佐々木弥生・齋藤絵美・北村かおり・小野寺峻一・巨理大也(2021)通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究(18)—個別の指導計画作成に資する「後方視的対話」の実施事例—教育実践研究論文集,8(印刷中).

佐々木全・東信之・柴垣登・鈴木恵太・滝吉美知香・千葉紅子・菅野亨・三浦隆・藤谷憲司・本宮和奈・川村真紀・菅原純也・橋場美和・藤井雅文・加賀智子・佐々木弥生・齋藤絵美・田口ひろみ・坪谷有也・上川達也・小山聖佳・田淵健・中軽米璃輝・森山貴史・名古屋恒彦(2020)通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究(13) — 個別の指導計画作成に資する「後方視的対話」を用いた研修の評価—教育実践研究論文集,7,141-146.

佐々木全・東信之・池田泰子・鈴木恵太・高橋文子・橋場美和・加賀智子・菊池明子・小山聖佳・上川達也・田淵健・中軽米璃輝・及川藤子・飛澤宣子・坪谷有也・森山貴史・今野文龍・名古屋恒彦(2019)通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究(11) — 個別の指導計画作成に資する「後方視的対話」を用いた研修の要領—教育実践研究論文集,6,169-174.

森山貴史・佐々木全(2018)「後方視的対話」活用による個別指導計画作成事例— 肢体不自由児の支援を担当する特別支援学校教員の省察的検討—,岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要,17,21-29.

佐々木全・東信之・坪谷有也・田村典子・福田博美・佐藤信・清水茂幸(2017)個別の指導計画の作成に資する「後方視的対話」の開発とその活用,教育実践研究論文集,4,108-113.



岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業

岩手大学教育学部では、学部の重点課題について学部と附属校園が連携・共同して研究を推進することを目的として教育学部プロジェクト推進支援事業(学部GP)を実施しており、その成果を論文集として発行しています。

【キーワード】 ICT教育, 理数教育, 外国語教育, 学校安全学, 復興教育, 学力向上, 幼小連携, 主体的・対話的で深い学び, 特別支援教育, 道徳教育, 小規模・複式教育, など

詳しくはWEBで! (スマートフォンの場合はQRコードを読み取ってください)

岩手大学教育学部GP

検索



【問い合わせ】岩手大学教育学部事務局 TEL:019-621-6505

特別支援教育の道具箱 [toolbox]

4

後方視的対話

2021.4.30

個別の指導計画の作成に資する

『後方視的対話』

実施内容と、研修の手引き

- 特別支援教育の道具箱【toolbox】とは、特別支援教育の取り組みを支えるツールを紹介するものです。
- 本内容は、附属学校特別支援教育連携専門委員会による成果物です。

課題と必要 【needs】

特別支援学校はもとより、特別支援学級に在籍する児童生徒や、通級による指導を受ける児童生徒について、さらには、通常の学級に在籍していながら、特別な支援を必要と判断された児童生徒について、個別の指導計画を作成・活用することが求められています。

しかし、個別の支援計画の作成に不慣れな教員にとっては、多少なりとも不安が伴うことでしょう。佐々木（2018）による教員を対象とした意識調査では、教員が不安なく個別の指導計画を作成するためには、「作成の経験が豊富であること」「個別の指導計画の目標・方法（支援の手立て）・評価を円滑に記述できること」が不安を軽減する要因であるとの指摘がなされました。換言すれば「経験知」と「方法知」といえます。私たちは、これらを得られるような、個別の指導計画の作成に資する研修内容及び方法の開発を求めました。

構想と開発 【concept】

構想のポイント① 教員の得意分野からはじめる好循環（書くことより話すこと）

「さあ、書くぞ!」と個別の指導計画の様式を目の前にしたとき、「何を、どう書こうか」と構えると手が止まる、思考が止まることがあります。その結果、記述のための言語化に至りません。しかし、放課後の職員室での炉辺談話で、教員は「今日の授業でね～」と今日の授業を振り返り、一人一人の子どもの様子について同僚と話し込むことがあります。そこでは、多くの言語化がなされます。

構想のポイント② 教員の得意分野からはじめる好循環（実践とそれを振り返ること）

「さあ、書くぞ」と個別の指導計画の様式を目の前にしたときというのは「計画を立てるぞ」という状況、換言すれば「PDCAサイクルのP段階」を始めようとしている状況です。一方、炉辺談話は、「PDCAサイクルのC段階」を展開している状況です。その前提には「PDCAサイクルのD段階」としての「今日の授業」があります。

おそらく、実践者である教員は、実践を通じて考えるのが得意なのだろうと思います。そもそも、教員は日常的に実践をしています。これを個別の指導計画作成におけるPDCAに重ねて考えると、「D-CAP」と言い換えることができます。PDCAサイクルは、そもそもサイクル（循環）ですから、どこからスタートしても、結局は循環すればいいわけです。

後方視的対話の開発

炉辺談話の中にある実際の教員の語りと、その結果として得られる次の授業の構想、支援の構想を意図的に個別の指導計画につなげることができるのではないかと考えました。そこで「後方視的対話」を開発しました。ここでは、個別の指導計画を語り手と聴き手の対話をもって、日頃の授業や対象児の様子を振り返りつつ、協働的に個別の指導計画を作成していくことになります。この対話の経験は、いつでもどこでも実施できることから、経験知が得られやすいと考えられます。また、聴き手による質問によって、目標・手立て・評価の内容にかかる思考や言語化を促進することができ、

□□■□□ 仕様と仕様 【needs】

「後方視的対話」は、話し手と聞き手の対話によってすすめます。その手順を表1に示しました。その対話によって導き出された内容は、後方視的対話演習シート(図1)に書き込まれていきます。このシートは二段組みになっており、その下段が「個別の指導計画」となります。

表1 後方視的対話の手順

- ① 実践によって得られた児童生徒の姿はいかなるものだったか。：図1の中では、発問の頭出しを兼ねたアイコンとして「①【今まさに】」と記されている。これは個別の指導計画における「評価」欄の記述に相当する。
- ② その姿の実現場面で講じられていた手立ての内容は何か。：図1の中では、発問の頭出しを兼ねたアイコンとして「②【振り返ってみれば】」と記されている。これは個別の指導計画における「手立て」欄の記述に相当する。
- ③ この手立てによって、児童生徒のいかなる姿を目指したのか。：図1の中では、発問の頭出しを兼ねたアイコンとして「③【そもそも】」と記されている。これは個別の指導計画における「目標」欄の記述に相当する。
- ④ 次時の目標は何か。：図1の中では、発問の頭出しを兼ねたアイコンとして「④【まずここから】」と記されている。この時①～③をもとにして、現実的で妥当な目標の内容と表記によって設定する。
- ⑤ 目標の実現に資する手立ては何か。：図1の中では、発問の頭出しを兼ねたアイコンとして「⑤【これを目指して】」と記されている。この時①～③をもとにして必要な内容を加除修正しつつ考案する。

※ 以上の手順①～③は、個別の指導計画の項目である。ただし、目標・手立て・評価が逆順(後方視的に)記述されたことになる。これは、次時個別の指導計画の根拠としての意味をなす。その上で、手順④～⑤の正順(前方視的に)をもって次時の個別の指導計画が作成される。

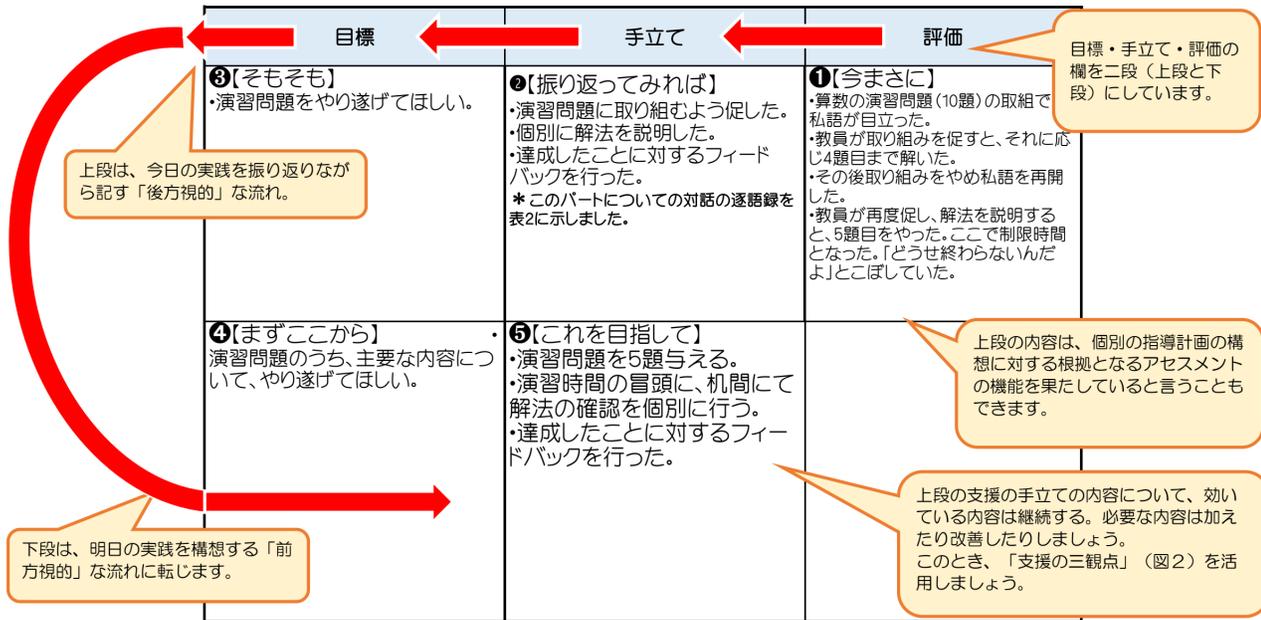


図1 後方視的対話演習シートとそれによる個別の指導計画作成例

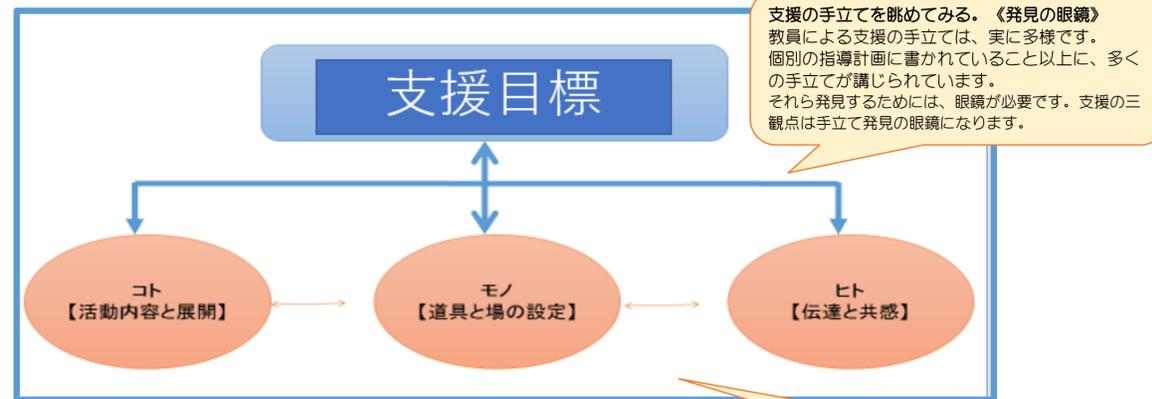


図2 支援の三観点

コトとは、「やることなすこと」です。「活動の順番/構成(正順か逆順か/部分か全体か)」などの工夫です。
モノとは、「ハード(面)」です。使用する道具や補助具は勿論のこと。作業場の構造や作業動線なども重要です。作業動線が整っていた方が、作業手順の習得もしやすいはず。
ヒトとは、「ソフト(かかわり)」です。「何をどうするか」についての伝達や「取り組みの経過や成果」に関する労いや励ましという共感です。

支援の手立てを書いてみる。《発見の眼鏡》
「~できるように支援する」「~させる」という記述があったなら、立ち止まって自問しましょう。「~できるように、どんな手立てをもって支援するのですか?」と。つまり、「~できるように支援する」「~させる」には、手立てが書かれていないのです。発見するためには、足場が必要です。三観点は、そんな発見の足場になります。

表2 後方視的対話の実施事例(逐語録の一部)

発言者	発言内容	聞き手の意図
聞き手	それに対して、 振り返ってみれば 、どんなアプローチがなされていたか?	質問形式【振り返ってみれば】を用いた進行
語り手	この子の手が止まっている様子が見えたので、そばに行き取り組むように促しました。	
聞き手	どのように促したのですか?	指導の経過に関する言語化の促し
語り手	えーと、「ほら、やって、やって」と。	
聞き手	声をかけたわけですね。その子の反応は?	指導方法の明確化と、見取りの想起の促し
語り手	私の視線を気にしてしぶしぶとやりはじめましたが、私が立ち去ると、間もなく手が止まりました。	
聞き手	机間巡視しながら、気にかけていらっしゃったんですね。どうして手が止まったんでしょうか?	指導方法の明確化と、見取りの想起の促し
語り手	もともと意欲が低いのですが、解き方がわからないのかと思いました。	
聞き手	なるほど。その見立てに基づいてどうかかわったのですか?	指導方法の明確化
語り手	もう一度、そばに行って一斉指導で説明した内容を、個別に繰り返しました。	
聞き手	どんなふうに?	指導方法の明確化
語り手	ノートに書きかけていた例題に、私が上書きする形で、要点を蛍光ペンでマークしながら説明しました。	
聞き手	口頭で説明しながら、要点を視覚的に確認することをしたのですね。	有効な指導方法の明確化
聞き手	そうしたらどうなりました?	指導方法の効果の確認
語り手	5題目に取り組み、説明内容に即して解答しました。	
聞き手	できたことのフィードバックみたいなそんなことは?	指導方法の想起の促し
語り手	「そうそう、OKだよ」と声をかけたところで時間になったので立ち去りました。	
聞き手	なるほど。解法の確認をすることが手立てとして有効だったのですね。	有効な指導方法の明確化

* 聞き手は、語り手の思考と発言を促しつつ、語られた内容を後方視的対話演習シート(図1)に書き込んでいきます。

Q	個別の指導計画と、後方視的対話に関するQ-A	A
Q1	目標は、教科の内容にするべきでしょうか?	A1 自立活動の内容を踏まえ、生徒指導(生活面、行動面)のこともよいでしょう。ただし、評価可能な内容及び表記にしましょう。
Q2	目標の内容は、毎回変わるべきものでしょうか?	A2 ステップアップを想定することは当然ですが、ステップアップのタイミングは見取りに基づき検討しましょう。
Q3	手立ての内容は、毎回変わるべきものでしょうか?	A3 奏功している手立ては継続、不備不足があれば改善しましょう。いずれにせよ見取りが大切です。
Q4	今日の授業をもとに、明日の計画を立てることが例示されていますが、中・長期的なスパンで目標を考えるものですか?	A4 短期的スパンでなれると、中・長期的な目標の構想もなれるようになります。
Q5	話し手は、評価・手立て・目標を整理して話すべきですか?	A5 いいえ。聞き手との対話によって整理をしていきます。気楽に、存分にお話ください。
Q6	後方視的対話をする際に、必要な物はありますか?	A6 特にありません。実践の想起・伝達の手がかり(教材など)があるとよいかも。
Q7	対話あまり広げられない場合や、途中で止まってしまった場合は、どうすればよいでしょうか?	A7 聞き手の工夫のしどころです。①【今まさに】で話が膨らむと、その後円滑かも。
Q8	聞き手は、語り手の話の途中で、手立ての内容などに助言をしてもよいですか?	A8 基本的にはしません。両者に上下関係や依存関係ができないように留意します。
Q9	必ず2人1組(ペア)で行うものですか?複数教員で担当している授業の場合は、全員で行ってもよいのでしょうか?	A9 はじめはペアからはじめるとういでしょう。慣れてきたら、聞き手が進行しながら複数で対話することもよいでしょう。